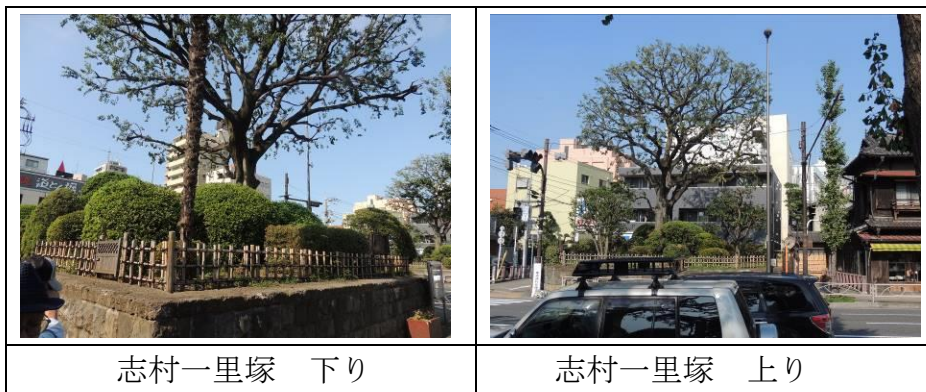


志村から蕨宿

10月1日 (火) 晴れ

- ★ 3 か月ぶりの例会に参加したのは 11 名。10 月になれば涼しくなると思っていたが、最高気温が 30℃に迫る暑さであった。
- ★ 都営三田線の志村坂上駅で下車して、後方の改札を出ると目の前に志村一里塚がある。江戸日本橋から三里目の一里塚で、塚木は榎である。5 間（約 9 m）四方、高さ一丈（約 3 m）の塚が道を挟んで 2 基、完全な形で保存されている。石垣は昭和 8 年から行われた新中山道の工事の際に土砂の流失を防ぐために施された。



- ★ 志村坂上の交差点で国道 17 号から逸れて坂上交番の横を左へ行くのが旧中山道である。道端には道祖神も立っている。道はやがて大きく蛇行しながら急な下り坂となる。清水坂という。中山道を京へ向かうとき、富士山は常に左手に見えているが、ここでは道が大きく曲がっているため、中山道唯一の「右富士」の名所であった。



- ★ 坂を下りきり、右折して都営三田線のガードをくぐると国道 17 号と合流する。中山道と環八通りとの交差点近くから旧道に入るが、志村坂下で再び国道 17 号と合流する。日陰のないカ

ンカン照りの道を歩くと新河岸川にかかる志村橋を渡る。橋の北詰めに大きなパチンコ屋があるが、その裏の住宅の一面にひっそりと「舟渡の板碑」が立っている。それによると、鎌倉時代から室町時代末にかけて親や自身の死後の供養のために造立された石製の供養塔で板碑と呼ばれるもので、周辺にあったもの10基を集めてお祀りしたという。そう思って見ないとただの石ころと間違えそうなものであった。

- ★ 舟渡の板碑から旧道を行き、新幹線の高架下をくぐると荒川の土手で、土手を登ると戸田渡船場跡である。彼岸花が咲いている土手の一面に「中山道戸田の渡し」の石碑と説明板が立っている。土手から対岸を眺めれば、赤羽ゴルフ場などがある広い河川敷の先にかすかに荒川が見える。江戸時代には「戸田川」と言ったようで、江戸防衛上架橋されず、舟渡しであった。渡し用に馬船、平田船、伝馬船、小伝馬船など13艘が常備され、渡し賃は6文であったという。



- ★ 渡船場跡のすぐ上流側に国道17号と新幹線・埼京線の鉄橋が架かっている。我々は国道17号に架かる戸田橋を渡って埼玉県戸田市に入った。戸田橋の北詰からすぐ右手の土手にゆくと「中山道戸田渡船場跡」の石碑と説明板が立っている。



- ★ 歩き始めて約2時間、真夏のようなギラギラの陽を浴びて歩いて相当に疲れたので、ロイヤルホストに入って冷たい飲み物やアイスクリームなどを注文して一息ついた。冷房も効いていて気持ち良い。こうして過ごしているうちに時間も4時半を過ぎていたので、この先蔵宿まで行く予定であったが、散策を打ち切り近くの戸田公園駅から埼京線に乗り池袋まで戻ってきた。

例によって池袋駅西口の居酒屋に行くことになったが、ここでちょっとした騒動があった。エレベーターで3階まで上がって店に入ろうとしたらM氏の姿が見えない。そこへM氏から電

話があり「はぐれちゃった どの店？」 しばらくして又電話があり「どこ？ わからない」
そこでS氏が迎えに行ったが見つからない様子でM氏からもS氏からも電話 堪りかねてH氏
も迎えに出たがそれでもダメ 結局S氏にM氏の電話番号を教えたらまもなく3氏が出会うこ
とができた 「伝聞では話は通じない 直接話すのが一番」ということ



戸田の渡し付近で

戸田の渡し跡の彼岸花が印象的でした。二人とも同じ題材の俳句でした。

荒川の 堤彩る 彼岸花

旧道の 舟の渡しや 秋暑し 志賀 勉

街道を 流るる雲や 彼岸花

国境の 船の渡しの 秋思かな 滑志田流牧

参加者 奥野和雄、河合宏則、小島恕雄夫妻、志賀勉、滑志田隆、原田一彦、
水野聰、水野博司、臼井静江、中村仁美 以上 11 名

写真と文 小島恕雄